

生 邦 辻

新潮社版



あま くさ が か
天 草 の 雅 歌

定価 750 円

昭和四十六年四月十五日 印刷
昭和四十六年四月二十日 発行

著 者 辻 邦 生

発行者 佐藤 亮 一

発行所 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(28)一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

天草の雅歌
目次

第一部

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
天	潮	秋	岬	鳥	夏	波	木	花	糸	火	序
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

第二部

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
結	雲	誓	島	影	風	螢	星	冬	海	渦	夜
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷

三五	三四	三八	三二	二五	二六	二五	二五	二九	二〇	一五	一七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

装
画
福
井
良
之
輔

天
草
の
雅
歌

福永武彦氏に

わが愛する者の声きこゆ、視よ、山
をとび、岡を躍りこえて来る。

— 雅 歌 —

第一部

1 序の巻

長崎奉行配下の通辞（通訳）上田与志の密航事件に関する記録は、有名な長崎の犯科帳（裁判記録）にも見あたらない。この事件が寛永十七年（一六四〇年）におこったことでもあり、また犯科帳が寛文六年（一六六六年）から記録されている以上、時期的にも、それが収録されなかったのは当然だが、キリシタン関係の事件は、その後になっても、犯科帳には記録されないのが通例なので、たとえ何らかの形で裁判記録がつくられたとしてもそれは別個の形で保存されていたに違いない。もちろん上田与志の事件が純粹にキリシタンに關係のある事件かどうかという点になるとかなり曖昧などころがある。ただ当時、日本人の海外渡航を禁じた鎖国令が出されており、それを犯した者は死罪をもって罰せられるのがわかっておりながら、あえてそれを犯すとなると、人々は、その動機をキリシタン宗門への死を賭した信仰以外に求めることができなかったのである。まして上田与志その人が、交易事務を管理し、海外渡航を監視する長崎奉行所直属の通辞であり、さらにそのうえ、長崎奉行馬場三郎左衛門の信任を得た補佐役として活躍しており、事件発生当時すでに大目附井上筑後守政重の祐筆（ゆうひつ）として江戸への転勤が決っていたといわれる。そうしたいわば官僚機構の中心部にいて、ひたすら昇進のコースをたどっている人物が、なぜ容易に

発覚する可能性のある密航などを企てる気持をいだいたのか。おそらく密航や密交易に関しては、種々のからくりを知悉しているはずの人間が、なぜ長崎港外に碇泊中の唐船へ泳ぎわたるというような、無知で向う見ずな若者じみた行為を思いついたのか。

こうしたことは当時の人々にとって不可解だったばかりでなく、本人もそれについてはほとんど何も語らなかつたらしい。幕府当局もそうした中枢部で発生した失態は、あまり公表を欲しなかつたのであろう。上田与志は事件後、月ならずして、長崎奉行所牢屋敷で死を賜わっている。キリシタン弾圧の嵐が吹きまくっているさなかで、それは、何か部屋やまの片隅で、人眼につかぬ燈火が消えたような印象を残す。長崎交易のほうも、ポルトガル船の来航を禁じて間もないころであり、呂宋ルソン、天川マカオ、マラッカ、ソーランなどのあいだの通商戦は激しく、上田与志の死んだその年にも、長崎来航のポルトガル船が焼き払われているのである。

普通に考えれば、上田与志のような能力と地位をもつ人間にとって、それは十二分に腕のふるえる、機会に富んだ時代だったはずである。いったい何が彼を駆りたててこのような事件にむかわせたのか。

こうした疑問とともに、当時人々のあいだに流れた風聞によると、上田与志は切腹の際にあらぬ言葉を発して、武士らしくない見苦しい態度で死んだというのであり、他の噂によると、それは立会人の誰にも理解できなかった異国語であつたというのであつた。また別の噂によると、彼は刀を腹に突きたててから後、立ちあがつて何事かを叫んだとも、また何か叫びながら、二、三步あるいてから、刀の上に自ら倒れて死んだとも言われていた。

噂の内容はまちまちだったが、上田与志が最後に大声で何ごとかを叫び、その叫んだ言葉を誰一人わかる者がいかなかったという点で、それぞれ奇妙に一致していた。

上田与志の晩年はその目ざましい活躍にもかかわらず、不思議と、無口で、陰気な印象をあたえた。彼は役目以外には、老僕が一人いるだけの長崎奉行所の下屋敷に起居し、終日家に閉じこもり、遊山はおろか、上司や朋輩のところにしか出かけることも少なかった。酒席でも酒は飲まず、ひとり黙って周囲の陽気な賑わいのなかにとりのこされていた。一度結婚したが、その妻とは別れていた。彼の身辺には、寂寥感というより、一種の冷たさ、暗さがつきまとった。もちろん役所で朋輩に会えば冗談の一つも口にするだけの社交性はある、部下にも寛容であったが、それさえただ役目のうえの義務を果しているような印象をあたえた。

おそらくこうした晩年の印象が、彼の死にまつわるあのような奇妙な噂をつくりあげたに違いない。しかし当時、彼の周囲の人々、上司にせよ、朋輩にせよ、上田与志のこうした性格に対しては、むしろ寛大であった。もちろんそれは、彼の優れた才能と手腕のせいであったが、さらにそれだけでは説明できない何かがあるようであった。しかし果してそれがどんな事情なのか、という話になると、誰しも奇妙に口をつぐむのだった。

上田与志は子供のころから、自分の父が士分をきらって、堺で武具商を営み、磊落で、陽気で、物に屈託しない人物だったと聞かされていた。そしてその父の思惑は、合戦のはじまる間際に、城下に出むいて甲冑刀剣を売りさばくだけではなく、戦場にまで出かけて商売をすることにあつたとも聞かされていた。

この上田与兵衛は関ヶ原合戦のさなかに行方不明となった。死体はついに発見されなかったが、流れ弾にでも当って死んだことはほぼ確実であった。

「おれの父は善人で、人眼に立つことならなんでもやったそうだ。三村社の祭礼のとき堺会合衆の依頼を受けて、花で飾った山車のうへで太鼓を叩く一番手は、おれの父だったということだ。」

父は怠け者ではなかったが、結局は善人だったのだ。一攫千金を夢みて、戦場へ商売をしにいったが、せいぜい侍大将あたりに鎧具足売りつけるぐらいが関の山だった。それでも、敵と味方の両方で商売ができたりますと、おれの父はひどく相好を崩して得意がついていたというのだ。おれは父の顔など憶えてはいないが、そんな話をきくと、その善人づらが眼に見えるような気がする。ところがその間に、たとえば堺の木屋とか伊予屋とか、京都の角倉^{すみのくち}などは、部将にとり入り諸侯に金を貸しつけ、その金で自分たちの武器を買わせて、相手に恩を売っていた。彼らのおさえたのは侍大将などという小者じゃなくて、大名たちなのだ。木屋などはおれの父と大して身分の違わぬ商人だった。だが彼は木材廻船で儲けた金を、すべて徳川方にそそぎこんだ。家屋敷を売ってまで軍資金を立て替えたのだ。そんなとき、善人の父は何人の侍大将をだませるか、鎧を背負って、戦場を歩いていったのだ。愚かしい死さ、おれの父の死は。それはおれの母も知っていたに違いない。おれの父は鎧を担ぎ、鼻唄でもうたっていたのだ。得意気にな。そのとき弾丸が父の胸板をつらぬいたに違いないのだ」

上田与志は同僚の通辞小曾根乙兵衛によくそう言っていた。小曾根はたまたま同じころ堺の町に住み、二人とも同時に大安寺の僧栄達のところまで読み書きを学んだので、時には昔話が出るこゝとがあつたのである。

上田与志の母は、その後十年ほどして病気で世を去った。与志の十一歳の秋である。

当時、堺にはポルトガル船、オランダ船の姿はほとんど見られなかったとはいえ、なお朱印船交易で活躍する角倉船、末吉船が賑やかに入港して、商人たちの権勢も盛んだったが、そうした堺にいて、上田与志が早くから商人を嫌っていたのは、こうした父の記憶があつたからである。

「父は、堺の商人は天下御免だ、誰にも拘束されぬ、思いのままに生きられる、そう言っていた